【レポート】

田熊石畑遺跡の保存を求める市民運動について

矢田公美

田熊石畑（たぐまいしはたけ）遺跡は、戦前現地にあった宗像高等女学校の教師田中幸夫氏が校地から弥生土器や勾玉などをみつけ、あたり一帯が弥生時代の遺跡であると報告し命名されました。国道沿いに有志の寄付で郷土館が建てられ出土品が納められたといいます。戦後校舎は宗像高校となり、高校移転後は中央中学校になりました。中学校が新築移転後、郷土館は廃止され出土物の一部が宗像高校の四塚会館に納められました。土地は民間の開発業者に売却され、40年間以上ほぼ空き地のままでした。

地権者が東郷地区の活性化を目指してショッピングセンターと住宅地造成を行うことになり2008年4月から1年間の予定で事前の発掘調査が行われていました。調査が始まってまもない6月4日、新人訓練をかねて南西側の遺跡周辺部を掘っていたところ、弥生時代中期前半（2200年前）の武器形青銅器5本が出土したのです。9基の墳墓のうち6基を発掘して計15本の青銅武器が出土し、同時期で日本最多と報道されました。ヒスイの垂飾（ペンダント）や碧玉の管玉（くがたま）などの副葬品もあり被葬者は有力な首長であると判断されました。発掘が進むにつれ、環濠跡や陸橋、貯蔵穴、竪穴住居跡、また遺跡中央部からは整然と並んだ掘立柱建物跡が25棟分以上みつかりました。土器の破片から古墳時代の倉庫跡と考えられるとのことでした。約33000㎡の校地跡に広がる遺跡を商業地つき住宅地にしてしまってはならない、是非とも残したいという思いを強くしました。

まず、むなかた歴史を学ぼう会が11月末に遺跡保存の要望書を市長と市議会議長宛に提出しました。そして12月14日に行われる田熊石畑遺跡の現地説明会直前の12月5日夜、歴史を学ぼう会、発掘従事者、宗像歴史観光ボランティアの会、遺跡の前途を気づかう市民グループの有志13名が会合しました。既存の団体ではなく遺跡保存に専念する会を立ち上げて、この遺跡の重要性をもっと広く市民に知らせ、保存を働きかける運動をすべきだという結論に達しました。

「田熊石畑遺跡の保存を求める会」はこうして発足しました。会期は、その夜から遺跡保存に目途がつくか、絶望的になるまで。活動資金は会員の一口千円のカンパで賄い、用紙代、印刷代、会場費、通信費、講師料などにあてることにしました。会員連絡はメールとFAXにしました。遺跡の保存を求める趣意書を作成して発起人を依頼し、会員を募るかたわら現地説明会にむけた準備に奔走しまし

た。市からの現地説明会案内の配布に協力し、説明会当日には参加者に会からの啓発チラシと署名用紙を配布することにしました。古代のクニの様子をイメージしたイラストは古賀市の歴史資料館館長が、現地の地図は会員がイラストレーターというデザインソフトウェアを使って描いてくれました。現地説明会を補完する形の学習会「田熊石畑遺跡が語ること」[1]（講師3名は考古学の専門家で発起人）も企画してチラシに予告しました。12日夜、現地説明会のための打ちあわせ会には20名あまりの新たな会員が加わりました。

14日の現地説明会は、朝10時から午後4時までの街頭活動でした。前夜からの雨があがり青空ものぞくおでかけ日和となりました。出足は好調で親子連れ、カップル、知人友人の姿もみえました。「田熊石畑遺跡の保存を求める会」の立て看板をたて、チラシを配布する会員は会員章タグをさげて、来訪者にアピールしました。快くその場で署名に応じたり、持ち帰ってくれる人もいました。用意したチラシ500部は一時間くらいで底をつき、500部増刷、午後用をさらに500部増刷しました。午後3時過ぎには時雨模様となりましたが、現地説明会の参加者は1008名だったそうです。

後日の反省会で話し合う中で、市長や市議会に「田熊石畑遺跡の保存を求める会」の存在を知ってもらうために、要望書を出すことにしました。要望書には、「宗像市の中心部に超一級の古代遺跡が残っていたのは、市と市民に天がもたらした素晴らしいプレゼントであること。古墳時代の倉庫跡は、ヤマト政権とつながる東郷高塚古墳の足元にあり、古代祭祀が始まる以前から沖ノ島を経由して朝鮮半島・大陸に至る宗像ルートの出発地と考えられること。この遺跡は『宗像・沖ノ島と関連遺産群』の世界遺産登録に弾みをつけること」などを盛り込みました。市役所が冬休みに入る直前の12月25日午後、秘書課と議会事務局を通じて要望書を提出し、年明けに市長と市議会議長との面会を依頼しました。

学習会は、一般の人に田熊石畑のすごさがわかるように三部構成にしました。第一部は「古代の日本と宗像」：宗像の語源に始まり縄文弥生時代の地形は、釣川流域に海が深く入り込んでいたことや海人族の暮らしぶりなどの時代背景について。

第二部は「田熊石畑遺跡で発見された遺物・遺構の持つ意味」：弥生時代の遺跡といえば吉野ヶ里がよく知られています。吉野ヶ里の墓制はこの時期北部九州では主流の甕棺墓、宗像地域は木棺墓，土抗墓であったこと。このたびの青銅武器出土で、甕棺文化圏の外縁に有力地域集団が存在していたことが証明されたこと。遺跡中央部で見つかった倉庫群跡は、古墳時代のものと推定され、入り海に注ぐ松本川を利用した海上交易を生業とした宗像海人が穀類や須恵器、鍛冶製品

などの交易物資を保管管理したものと考えられること。

第三部は「沖ノ島の神宝と海北道中」：海北とは朝鮮半島を、道中は渡る道の途中をさし、沖ノ島は海中にそびえる道しるべであったこと。大和王朝は海北道を往来して大陸の文物を導入するため玄界灘の重要地点を占めていた胸形族を大王家の一族に組み入れる必要があったこと。海の正倉院といわれる沖ノ島祭祀の豪華な奉献品は、古代胸形族が祀る宗像三女神を大和王朝が国家祭祀として行ったことを物語っており、この祭祀は、任那日本府成立の369年に始まり、894年遣唐使廃止まで約600年続いたことなど。

学習会には、約200名が参加しました。福岡近郊、福津市などから35名の参加がありました。受付，会場準備、司会、タイムキーパーなどに会員がかいがいしく働きました。この時点で会員数は50名になっていました。

さらに、講演会を2月14日に計画しました。「田熊石畑遺跡の掘立柱倉庫群とその歴史的意義―古墳時代の大倉庫群はなぜ建てられたか？」[2]古墳時代に絞った少し専門的な講演会です。ＰＲ手段を持たないので、学習会資料にその旨を予告しました。

1月6日には遺跡の地権者の方を中津市に訪問しました。遺跡の重要性や遺跡保存を求める市民活動があることを伝えました。地権者の方は、住民の望まないような開発はしないといわれました。9日には市議会議長と面会しました。このとき遺跡についての関心は、議員の間で必ずしも高くないことを実感しました。そのうち市が保存の方向で地権者と最終交渉をしているとの話が伝わってきましたが、市長との面会は1月末になっても実現しませんでした。署名が5000名を越えた頃、3月議会に向けて署名付き請願を出すことにしました。2月11日「宗像市が遺跡購入」[3]との報道があり、市長との面会が2月19日と約束されました。

2月14日（土）の講演会は、午前10時からメイトム宗像の多目的ホールで行われました。ミニ体育館といった場所なので、朝9時前から会員が150人分の椅子を運びこみ、机を並べることから始めました。忙しい若手考古学者の講師が、開会の10分前に持ちこまれた17枚の印刷物150人分を、手際のよい会員たちがまたたく間に綴じ合わせて講演に間に合わせる場面もありました。

聴衆は新鮮な情報に熱心に聴き入りました。掘立柱倉庫群の例は国内に8カ所ほどある。田熊石畑遺跡は6世紀を前後するとみられているが、25棟以上の倉庫群は古墳時代の遺跡では他に例がない。5世紀は対外軍事活動に伴う兵糧の備蓄をうかがわせるが6世紀になると屯倉（みやけ）など、ヤマト政権の地方支配との関係が現れてくる。宗像の須恵須賀浦遺跡は、6世紀頃の登り窯が多数発見され一大須恵器生産地であった。朝町川上流の朝町山ノ口遺跡の墳墓からは、鍛冶に使われる

国内最大級の鉄鉗（かなはし）や鉄槌（かなづち）が出土しており鉄器生産にかかわった集団がいたようだ。大井三倉遺跡の古墳群では槍鉋（やりがんな）、手斧、鋸がしばしば出土し、木工集団と関連づけられる。田熊石畑の大規模倉庫群は、こうした釣川流域で手工業生産の活発化に伴い、物資備蓄という実用的な要請から必要であったと考えられるなど。

この講演会の入場者は約160名でした。この席で、田熊石畑遺跡の保存に目途がついたこと、署名は市議会への請願に付けることで有効に役立てさせていただくことを報告しました。

19日に面会した市長は、遺跡保存の方針を決めてからも地権者との交渉が難航したため回答に時間がかかったと説明され、市民の要望に応えることができてホッしておられる様子でした。議会が来年度予算を承認すれば地権者と仮契約、文化庁に国指定史跡の申請をして6月に本契約を行うとのことでした。また、文化振興条例を作りたいとも言われました。わたしたちは、遺跡が来訪者に見える形で整備されることを求める請願を7879名の署名を付けて議会に出すことを伝え、翌日20日に請願を提出しました。

3月議会は2月27日の本会議で始まりました。市長は、当初用意されていた施政方針（案）に加筆して「田熊石畑遺跡に関しては、日本の弥生時代の環濠集落として、文化財関係者から国指定史跡に値すると評価されており、その歴史的価値を踏まえ、保存・整備や利活用に向け、計画的に取り組んでいきます」と言及されました。引きつづき、わたしたちの請願が紹介されました。紹介議員には地元田熊選出の議員と議論に強いお二人の議員に依頼しました。請願は文化財（市民協働部に所属）を所管する社会常任委員会に付託されました。

3月10日の社会常任委員会の審議を会員約15名が傍聴しました。2時間を超える議論でした。1月初めに田熊石畑遺跡に関連する資料を全議員に送付していましたが、議員の方々の関心は、やはり高くなく、11億円を越える用地取得費用の計上という財政負担増について特に強い抵抗がありました。「一年前には税収が見込める開発をすすめることで合意していたのに予定変更は唐突で、決断が拙速に過ぎる」などの意見でした。紹介議員の一人が「発掘調査は、貴重な文化財を開発から守るために国が義務づけている。歴史的遺産が開発によって破壊されることなく、後世に残せるようにするためである。保存を求める会の活動は、学習会や講演会を開催して、広く市民に知らせようとするなど本市がめざす市民協働の面からも評価できる」と反論されました。そこで聞き慣れない「趣旨採択」（請願の趣旨にのみに賛成する）との動議が出され、その議員一名は退席されました。その後の賛成討論では、「お金では計れない豊かさを測る“ものさし”は、歴史・

文化を身近に感じる中で生まれてくる。過去から預かった貴重な遺跡を次世代と市民に理解できる形で整備することに賛成する」などの発言がありました。一名退席のまま全員賛成で採択されました。

3月16日（月）は予算特別委員会、3月27日（金）の本会議で請願は、賛成多数で採択となり、田熊石畑遺跡は、保存整備に向けて第一歩を踏み出しました。保存をもとめる活動は、ひとまず終わりを迎えることになりました。請願の行方を見届けた3月28日（土）夕方、初めてで最後となる立食パーティをひらき、27名が集まりました。

その席では「土の中に青いものが見えて、今日は3本、翌日は5本、そして8本、吉野ヶ里を越えて15本、ついに日本最多となりました」と、青銅武器に出会った興奮を発掘従事者が話してくれました。初めて市議会の傍聴をした方の感想や、「保存が決まって終わりではない。これからが始まりだ」という人もいました。４ヶ月間の短い会期でしたが、会員は強い結束と信頼感のある仲間となりました。

これから本格的整備までに5年10年の歳月がかかるかもしれません。しかし遠い昔の人々の営みが若い世代の目の当たりに復元され、世界の広がりと歴史の深さが子どもたちに郷土愛、人生観を養うことを願って「田熊石畑遺跡の保存を求める会」は、活動を終了します。

＊1　学習会「田熊石畑遺跡が語ること」
　　2009年1月17日：講師　鎌田隆徳氏（福岡県文化財保護指導員）、
　　花田勝広氏（日本考古学協会会員文学博士）、
　　松本肇氏（日本考古学協会会員）

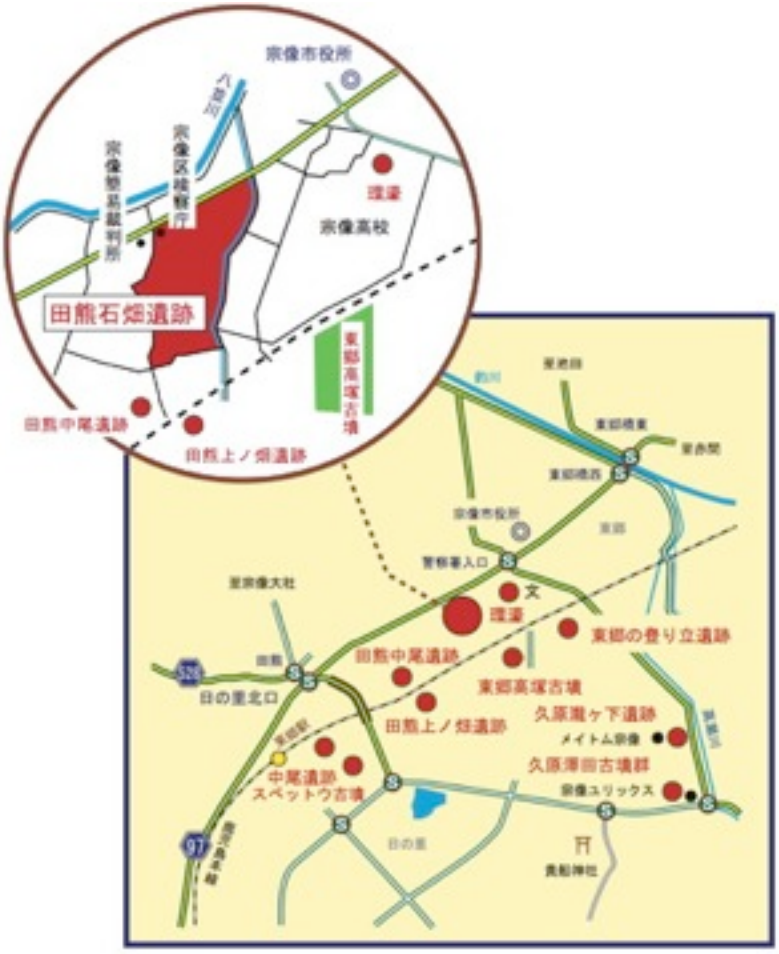
＊2　講演会「田熊石畑遺跡の掘立柱倉庫群とその歴史的意義」
　　2009年2月14日：講師　桃崎祐輔氏（福岡大学）

＊3　毎日新聞2月11日　朝刊

（ 矢田公美：田熊石畑遺跡の保存を求める会代表）

田熊石畑遺跡については『宗像考古学』ウェブサイトが詳しい。（編集者注）
http://munakatakouko.web.fc2.com/

3月28日　田熊石畑遺跡の保存を祝う会（グローバルアリーナ）



田熊石畑遺跡と周辺遺跡